

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第479号 平成25年1月24日

八甲田山（3）

明治35年1月23日早朝6時30分、青森5連隊の雪中行軍隊210名は5連隊宿舎前に整列後、神成大尉の号令一下「田代新湯」に向かって行軍を開始します。たかだか1泊2日の行程ですので、誰一人この後に待ち受けている地獄を想像した者はいなかった筈です。

以下、青森隊が如何にして奈落の底に引き込まれていったか、「指揮官の決断（山下康博著）」を基に辿ってみたいと思います。

青森5連隊による雪中行軍隊は、神成大尉率いる「主力本隊（4個小隊）」、長期伍長による「特別小隊」、更に山口大隊長率いる「臨時移動大隊本部」による混成チームとなっています。そして、この大部隊は、カンジキを履いた一個小隊（40名）を先頭に、残余の小隊、「特別小隊」、「臨時移動大隊本部」がこれに続き、行李輸送隊56名が最後尾につくという序列で進んでいきます。

行李を積んだ櫓は予備一台を含め14台、1台当たり4名がつき、2名は前から引き、2名は後ろから押して進んでいきます。しかし、ちょっと想像すると分かる事ですが、下が圧雪状態ならいざ知らず、1メートル前後もある積雪の中を80キロの荷物を積んだ櫓を引いて行軍するというのは、極めて困難な作業だった筈です。

それでも行軍隊は、「田茂木野」を經由して約10キロ近い行程を4時間半かけて進み、午前11時半頃「小峠」に到着します。そこで隊員たちは昼食をとろうとしますが、携帯の握り飯は既に半ば凍結し食べられる状況ではなかったようです。

これより先「田茂木野」では、村民が「明日は『山の神の日（つまり大荒れになる危険が高い）』だから山には入らぬよう」諫言するのですが、青森隊は村民を叱り飛ばして行軍を決行します。またその際、村民は「どうしても行くというなら、せめて案内人を用意する」と申し出ていますが、これに対しても「其の方共は銭が欲しくてそういうのだろう」と叱り飛ばして受け付けなかったといえます。

「実際の戦場を想定した場合、いちいち案内人を付けるか？」というのは建前としては正しくとも、こうした判断は、結果として部隊全滅という事態を招く一番大きな原因となりました。

さて、「小峠」に到着したけれども、先程述べたようにまともに食事を取れる状況ではなく、風雪も一層強まる中、気温の低下により兵卒達の体感温度が限界に達し

ていると判断した軍医が、「いったん帰營して兵卒達の防寒装備を更に嚴重に改めた上で出直すべきである」と進言します。この意見具申を受けた山口大隊長は將校を集めて帰營するか否か協議を始めるのですが、そこに見習い士官や長期伍長らが押しかけ、軍の威信を前面に押し出し強固に進軍を主張します。

山口大隊長はこの声に押されるように、「田代新湯」を目指し進軍するよう命じてしまいます。帰營を促す慎重論が敗北主義を嫌う血気盛んな声に押し切られた瞬間でした。

この、冷静な議論を頭から否定し、建前を錦の御旗にした蛮勇こそ、部隊全滅のもう一つの要因といわざるを得ません。

正午頃、行軍隊は「田代新湯」目指して行軍を開始するのですが、「田代新湯」までは「馬立場」という標高730メートルを上り切らねばなりません。

風雪がますます厳しくなる中、午後4時過ぎ「馬立場」に着きます。「田代新湯」まで後3キロメートルの地点まで来た事になります。後は下りで、しかも、風雪の間から「田代新湯」が一望出来たといえます。

しかし、行軍隊はここで、日没まであと僅かしか残されていないにもかかわらず、足止めを食います。なぜなら、本隊が「馬立場」に到着した時点で、行李輸送の橇隊は遅れに遅れ2キロメートル以上も後方にあつたからで、本隊から80名以上を橇隊の応援に差し向けなければなりませんでした。この間1時間以上をロスし、行軍隊が「馬立場」を出発したのは午後5時を過ぎていました。

既に日は落ち、しかも猛吹雪の中、雪は隊員の胸まで埋める状況になり、橇は放棄せざるを得ない状況になります。そして、橇に積んでいた食料や鍋釜は橇隊の隊員が小分けして背中に結わえて運搬する事になるのですが、重い荷物を背負いながら雪深い中を進むのは、さぞかし難渋だった事でしょう。

そして、折からの暴風雪の中、行軍隊は遂に進退ままならず、夜の12時近くになって雪壕を掘って退避する事にします。この時作られた雪壕は深さ2メートルから2.5メートルと伝えられていますが、これでは、風はある程度防げても防寒には不十分だったと思われます。弘前隊も、雪中露營をしていますが、その際は深さ4メートルの雪壕を掘っています。それは、福島大尉が訓練を通して、寒気を和らげる為にはその位深く掘る必要がある事を学んでいたからでした。

青森行軍隊は、その後八甲田山中を迷走し、遂に210名中199名が犠牲になるという大惨事となりました。

これ以上詳細に青森行軍隊遭難の顛末を述べる事は、冗漫に過ぎましよう。

ただあえて申し上げれば、青森行軍隊は、この大惨事を避けるチャンスが少なくとも2度はあつた事を、皆さんはお気づきだと思います。

第1のチャンスは、「田茂木野」で村民の忠告を受けて行軍を中止するか、案内人

を確保する事でした。仮に案内人を付ければ、少なくとも「馬立場」から目的地の「田代新湯」には辿り着けた事でしょう。

第2のチャンスは、「小峠」に到着した際、リーダーが軍医の忠告を尊重し、勇気を持って行軍中止を決断する事でした。強い声に押されて判断を誤ったリーダーの責任は、重たいものがあります。

青森行軍隊は、いずれのチャンスをもみすみす逃した事になりますが、100年前の出来事を、今の時点で評価し批判するのはアンフェアだと思っています。しかし、そうした点を考慮してもなお、青森行軍隊の遭難は天災というよりは人災の色合いが濃いとわざるを得ません。

青森5連隊は、兵を動かすに際して「敵を知り己を知る」という一番大事で、かつ、基本の事を見失っていたのではないのでしょうか。

また、青森5連隊に行軍実施を急がせた背景には、ロシアの脅威に対する焦りというより弘前隊への競争心があったように思います。そして何よりも、客観的な情報を軽視するという、悪しき精神主義の萌芽を感じさせます。

最後に、極限下で福島大尉、神成大尉二人のリーダーが残した言葉を紹介してこの項を終わる事にします。

1月27日、露營の命令を発した際の福島大尉は「吾人若し天に抗する気力なくんば、天は必ず吾人を亡ぼさん。諸子夫れ天に勝てよ」と、部下を叱咤激励します。

一方の神成大尉は、1月25日田代への道を見失った際「天は我々を見捨てたらしい。俺も死ぬから、全員昨夜の露營地に帰って、枕を並べて死のう」と叫んだといひます。

行軍隊の隊員達は、福島大尉の言葉からは闘争心を、神成大尉の言葉からは絶望を感じ取った事でしょう。(塾頭：吉田 洋一)